

## 「地理」「地理学」と私

松井一郎

地理学教室の皆様、先生方、そして諸先輩の皆様方、お元気ですか。1981（昭和56）年3月に何とか卒業させてもらった松井一郎です。日頃は卒論発表会などのお誘いを定期的にいただきながら、すっかりご無沙汰いたしております。

卒業後、同年4月に枚方市役所に入職して以来約19年、市立図書館職員として勤務しています。1980年度を留年し、桃山学院の夜間講習に通って図書館司書資格を得たことが役立ちました。市内の図書館から離れた住宅地、それに病院・老人ホーム・保育園などをマイクロバス改造の移動図書館車で定期巡回して本を貸出する「自動車文庫」なども経験した後、現在は千里ニュータウンが出来る以前に「東洋一」と言われた香里団地のほぼ中心に位置する香里ヶ丘図書館で、サービス残業も厭わず精勤しております。

普段のカウンター業務では、例えば「旅行ガイドを借りたい」とか「住宅地図を見たい」といった市民からの問い合わせはたいへん多いのです（最近やや苦勞したものは「九州を舞台にした小説、または九州出身の作家の小説が読みたい」といったものでした）が、地理学に関することはほとんどありません。ただ、図書館の設置を行政として計画的に取り組んできた町ですので、市内には分館を含めて図書館と呼ぶものが9館、図書館分室が13箇所あり「分館のサービス圏域は半径1.2キロ」とか「図書館サービスの空白地域はどこか」といったことを日頃から業務の中で意識することが多く、市内全図を取り出して話し合う機会もたびたびあります。その意味では地理学的思考と言ってもいいのでしょうか、今も続いているような気がいたします。



スターリングの旧・川端屋敷にて娘と

さて、私が地理学教室のお世話になっていたのは1977~80年でした。「地理学」というものなんたるかを理解せず、ただ高校の「世界地理」が得意で、中でも外国の地名を覚えることが大好き、受験勉強も「机上世界旅行」で苦にならないというそのノリだけで入ってきた私にとって、概論や演習の内容には戸惑うものが多かったです。それを理由にするわけでもないのですが、ほとんど全ての講義において、決して熱心とは言えない毎日でありました。加えて、国鉄（！）阪和線の杉本町駅と地理学教室との間には当時完成して間もない田中会館があり、その真新しい喫茶室の方が薄暗い文学部棟よりも遙かに居心地がよかったというようなこともありまして、「通学するが田中会館まで」といった日もままあったように思います。ほんとうに蟹巻物ですね。先生方、ごめんなさい。

そんなお粗末な学生ではありましたが、野外巡検では思い出に残ったことが多く、特に巡検当日よりも下見に行ったときのことが強く印象に残っています。1978年春の巡検は、当時大学院1回生の大場茂明さんと我々学部3回生が担当で、川端基夫君や鷺見哲男君らとともに帝塚山・北畠周辺の市街地巡検をプロデュース（！）しました。下見の際には嶋中さんにもお手伝いいただきました。参考にしてもらおうと作成した地図に「松井一郎・1978」と書いて失笑を買ったことが、今となっては懐かしく思い出されます。また、同じ年の8月に行った岡山県北部での民俗調査、この時はほんとうに暑かったですね。地理学教室の学生として辛うじて足跡を残しているとすれば、これらの巡検をともにしたということぐらいではないでしょうか。

では、私はいったい大学時代に何をしていたのかというと、スポーツサイクリングばかりやっておったのです。入学と同時にサイクリング部に入学し、先輩の薦める店でオリジナルの自転車を6万円ほどで組み立ててもらい、それに乗って全国各地を走りました。始めのうちは先輩に連れられて金剛生駒山系の峠をいくつか登り下りし、やがて後部キャリアにテントを積んで奈良・高野山、さらに四国・九州・北海道とクラブ宿舎で走りました。自信がつくと信州の2000メートル級の峠を1人で回るようになりましたが、雑誌で読んだヨーロッパアルプスの峠越えにすっかり魅了され、いつしか学生時代の最大の目標となりました。そしてついに、3回生の9月（つまり、岡山県での調査の直後）に3週間「自主休講」してスイスを中心にアルプスの峠を13箇所も越え、車両が通行可能なアルプス最高所と当時言われたステルピオ峠（イタリア・標高2760メートル）にも到達しました。

語学力が十分でないばかりか、肝心の自転車のメカにも疎く、今にして思えばよくぞ無事で帰ってきたものであります。しかしながら、大学受験の際に首っ引きで読み耽った（と言うより、眺めて遊んだ）帝国書院の『新詳高等地図』に表記されている各地の姿を、日本だけでなくヨーロッパについても、それもほとんど自分の足だけを使って自分の目で見る事が出来た喜びは、何ものにも代え難いものであります。

とは言え、地理学の方は相変わらずさっぱりで、優秀な後輩が次々に入ってくる中では肩身の狭い思いをしておりました。そんな折、ちょうど20年前のことですが「地理学教室30周年」の集いの席上で、ある先輩から近況を尋ねられたものの地理学教室の様子などを話題にすることが出来ず、やむなく自分のサイクリングについてお話したところ「立派な地理やないの！」とおほめの言葉を頂戴し、自分の歩んでいる道が決して外れているわけではなかったことをこの時になってようやく気づいたよ

うな次第です。もっとも、今にして思えば「地理学」ではなく「地理」と言われたところがミソなんです...

サイクリングとの付き合いは卒業後も続いています。1986年と1996年に自転車を買い換えて、現在は3台目です。2台目時代の1990年にはニュージーランド南島を、クイーンズタウンからマウントクックまで走りました。ただし、子どもが産まれた1991年以降はマイホームパパとしてすっかり縮こまってしまい、ほとんど通勤ランのみです。自宅から現在の勤務地である香里ヶ丘図書館までは片道12キロメートル（所要時間40分）で1日に25キロ程度ですが、それでも年間5500キロメートル以上を走ります。働き始めてから20年近く、そんな日々が続いていることになります。

インターネットが盛んになり、我が家の可愛い「アイマック」でもかなりのレベルの情報検索が居ながらにして出来る世の中です。必ずしも肉体的な移動は必要としない社会になりつつあるように見えますが、例えば海外旅行はこの不況にも関わらず依然として人気があります。即ち「地理」への人々の関心は高いのです。この関心の高さを上手く発展的に取り込めれば、自ずと「地理学」への社会的な関心も高まっていくのではないかと思います。私自身は「落ちこぼれ」でしたが、地理学がますます発展し、市大の地理学教室とその出身である皆さん方が学界の先陣をきって進まれることを願ってやみません。

最後になりましたが、この春（1999年3月）に私は小学校2年生の娘とともに、スコットランド・スターリングに留学中の川端基夫ご夫妻を訪問しました。夫妻は1年間にわたって留学され、その間には様々の苦勞もあったと思いますが、我々が訪ねた4日間はお二人のおかげで本当に居心地のよいひとときでした。これもいわば地理学教室が縁となって実現した個人旅行です。既に8月に帰国されたというのに、娘から「またスターリングに行きたい」と言われるのが目下の頭痛の種ですが、このように素晴らしい体験が出来たことに感謝している次第です。後輩諸君同士においても、こういった繋がりが続いていくことを切に願っております。

（昭和56年卒業）